

O. Henry の作品と文体について

—その特徴と実証—

佐藤重夫

- 〈目次〉
- I まえがき
 - II O. Henry の作品における文体構成の背景
 - III O. Henry の文体に見られる特徴と実証
 - (1) Dramatic Surprise
 - (2) Humor と Pathos
 - (3) 倒置法と分詞構文の多用
 - (4) Euphemism と Euphuism
 - IV むすび

I まえがき

O. Henry (1862~1910) は 10 年足らずの間に、300 編近くの短編小説を書いている。その間、すべて短編のみに徹し、まさに純然たる短編作家であった。文学史的には、必ずしも重要な位置を占めている作家とは言えないが、彼の作品の多くはアメリカだけではなく、世界各国の言語に翻訳され、今日なお、広く世界の多くの愛読者を擁している。⁽¹⁾

このような O. Henry の魅力の秘密は、いったいどの辺にあるのであろうか。勿論、小説の魅力は洋の東西を問わず、何よりも「面白さ」という点に尽きると思う。その「面白さ」は、作者自身の文体構成能力によるところが大きいわけであるが、典型的な短編作家である O. Henry の場合、その「面白さ」を象徴する要素があるとすれば、そのいくつかを明確に指摘することができる。

その一つは、人生の様々な断面を見つめ、軽妙な文学表現によって、巧みに短編形式にまとめるという見事な手腕であろう。余人には見られぬ彼独得のユーモアとウィットがある。更に、深いペースを作品に漂わせながら、ヒューマニズムを浮き立たせている点である。

第二は、まるで読者の心理を見透かしているかのように、着想の奇抜さやプロットの巧妙な立て方である。これはまさに読者の関心事や心理を十分把握していなければ、到底不可能に近い特異な点である。

第三は、O. Henry の求めるテーマが、彼自身の苦難な生活体験の中から選ばれている点、つまり、創作の動機を与えてくれたアメリカ南部の生活や創作活動の絶頂期にあったニューヨークの裏町人生を採り上げ、善意に生き抜こうとする人々の喜怒哀楽を巧みな話術で描き出している点である。

第四の点としては、彼の作品にはいずれも起承転結が明確で、しかも、どの作品にも発端があり、ヤマがあり、結末があるという点である。殊に、読者の意表をつく dramatic Surprise は、O. Henry 独得のものであり、読者の心を強く惹き付ける所以でもある。

彼の作品の「面白さ」を構成する要件として、以上の特質を挙げることができようかと思う。

では、これらの特質が彼の作品の中にどう生かされているのか、そうした観点から O. Henry 文学の表現や文体を中心に考察してみたいと思う。

II O. Henry の作品における文体構成の背景

O. Henry の文体を考察する場合、それと切り離せない関係にあるのが彼の経歴である。「まえがき」でも触れたが、彼の創作活動の大部分が生活体験に基づいている点に注目すべきである。

では先ず、彼の経歴を簡単に振り返り、作品との関連を考えてみよう。

O. Henry はアメリカ南部のノース・カロライナ州に生れ、幼いとき母を失ってから変り者の父の手一つで育てられている。苦しい生活の中での彼は、殆んど教育らしい教育を受けていない。15歳になってから、叔父の経営する drug

storeで働いたり、カウボーイになったり、会社員、下級役人、ジャーナリスト、銀行員などと、職業を転々と変え、中年になって勤務先である銀行の公金着服の罪で5年の刑を受けるという数奇な運命をたどっている。このような人生を送った彼の作品の内容が、一貫した下層社会の複雑怪奇とも言うべき題材をテーマにするのは理の当然であろう。

彼の初期の生活体験を土台に素材を求めた作品としては、叔父の drug store で働いていた当時、身につけた薬剤の知識を生かした短編に、“At Arms with Morpheus”, “The Marionettes”, “Let Me Eeel Your Pulse”などがある。やがて、彼は肺結核の徴候が現われ、19歳のとき、健康とロマンを求めてテキサス州に赴き、ranchmanの生活体験をしている。その頃の題材を基にした作品と例えば、1907年出版の短編集、“Heart of the West”に収められている19編の作品である。これは ranchman 生活体験の結晶と言えるであろう。

当時、O. Henryはウェブスター辞典を座右に置き、古典文学を耽読していたということである。後年、読者ばかりでなく、批評家すら驚嘆させた、あの豊富なボキャブラリーは、その頃に身につけたものと思われる。彼にとってウェブスター辞典は、言葉の意味を知るだけのものではなく、思想の源泉であり、現実の世界を思うままに表現するための言葉の宝庫でもあった、⁽²⁾ということが想像できる。

妻と早く死別し、家庭的にも恵まれなかった彼が、創作に没頭できるようになったのは、5年の刑を済ませてから、48歳の短命を終えるまでの僅か数年に過ぎなかった。

刑務所内でのO. Henryは、叔父から得た薬剤関係の知識が役立ち、医師の助手として毎晩独房から独房へと薬を渡す手伝いをしながら、いろいろとストーリーのヒントを囚人の口から求めていたのである。それをもとにして世に問うた作品が、1908年出版の“The Gentle Grafter”に収められた14編の短編である。この短編集の中の“A Retrieved Reformation”のモデルとなった、愛すべき囚人 Jimmy Valentineも刑務所内での経験の所産でもある。また、刑務所では、暇を作っては短編小説の技術を磨き、1899年の処女作“Whistling Dick’s Christmas Stocking”をはじめ、その後の12編の作品を、ここで初めてO. Henryというべ

ンネームを使って次々と発表している。短編とはいえ、当時の作家としては多作傾向の一人といえる。これは彼自身の文学的評価を問うというよりもむしろ、金に困った苦難の生活から一日も早く脱却したいという欲望が強かったからではないかと推察する。

これについては、ニューヨークの Garden City Publishing Company 発行の “The Complete Works of O. Henry” の序文で、編集者も次のように述べていることからでも理解できる。

“At this time O. Henry was unknown and thought himself lucky to sell a story at any price.”

ところで、O. Henry はニューヨーク市をこよなく愛している。1902年に当市へ来てからの彼の文学的名声は、たまたま時を同じくして彗星のようにデビューした Jack London (1876～1916 “The Call of the Wild”の作者) と共に文壇の驚異的にもなった。

当時、広大な土地と豊富な資源に恵まれたアメリカは近代資本主義の上昇期にあったが、反面、失業、ストライキ、恐慌などの社会問題を抱えており、その代表的都市といわれたニューヨーク市には、いわゆる flat を住み家とする下級サラリーマンの巨大な層が形成されつつあった。これらの層はむしろ中流階級の中でも生活程度が低く、その flat での生活はどちらかと言えば、スラム街のそれに近いものであった。

O. Henry は好んでこれらの生活を題材としたが、1906年に当時のニューヨーク市の人口を題名にして出版した短編集 “The Four Million” がその代表的なものである。この作品に描こうとした理念は、彼の少年時代からの生い立ちや経験、そして、そこから生ずる下層社会への親近感、愛着といったものに対する精神的反映の現われである、と見て差しつかえないであろう。例えば、“A Harlem Tragedy”のように、安アパートに住む下級サラリーマンの家族を描いても、決して憎しみをもたせるようなことはせず、夫婦喧嘩の場合も、夫の愛情を試す一つの方法として表現している。“After Twenty Years”, “The Cop and the Anthem”, Tommy’s Burglar, “The Ransom of Red Chief”などの作品に登場させる人物、例えば、ルンペンや犯罪人は決して悪人ではなく、犯罪人を捕えよ

うとする警官も決して悪玉ではない。“Jeff Peters as a Personal Magnet”の中でも、その日暮しの主人公 Jeff Peters という人物がいかがわしいことをしても、読者に憎しみをもたせるところか、むしろ親しみを感じさせるように描かれている。

このように、O. Henry の描く人物像というものは、殆んど中流以下の小市民や黒人などで、しかも、それほど教育のない人々を扱いながら、善良で明るい親しみをもたせている。この点が、経歴のもつ背景に大きく影響される O. Henry の文体構成の基本的な特徴であり、彼の文体の形式を確立したものと言えるであろう。

また、O. Henry の作品の背景となっている settings を考えても、それは下宿屋であり、レストランであり、ホテルであり、垢抜けしたデパートの女店員の微笑にうつつをぬかす、アイオワ州やメイン州から出てきたばかりのお上りさん達なのである。V. W. Brooks はこう語っている。

“A piano-player in a cheap cafe might have shot lions in Africa, a bell-boy might have fought with the British against the Zulus, and O. Henry knew of an expressman who had been rescued from a cannibal feast when his arm was crushed for the stew-spot like the claw of a lobster.”⁽³⁾

そして、O. Henry の短編“The Furnished Room”の中の一節を利用して、“It (New York) was like a monstrous quicksand, shifting its particles constantly, with no foundation, its upper granules of today buried tomorrow in ooze and slime.”

と述べ、更に、

“... and mysteries followed one another closely in a town where men vanished like the flame of a candle that has been blown out.”

と結んでいる。

実に O. Henry は、単にニューヨークのうわべだけを描写することに満足せず、その奥に躍動する都会そのものの生命と特徴をとらえようと努めている。1900年代のニューヨークは、まさに O. Henry の作品によって不朽なものになったと言える。即ち、彼がニューヨークに出てから一年もたたぬうちに、“O.

Henry”という署名のある作品が、各種の雑誌や新聞の日曜版などに次々と発表されている。毎週1編ずつ書き上げるという、驚くべきペースで、1903年から1906年までの数年間も続いた、という。⁽⁴⁾特に、1904年から1905年にかけての僅か一年で発表した作品だけでも115編の多きにのぼっている。中でも、傑作が一番多いといわれる“The Four Million”の25編(1906)をはじめ、“The Trimmed Larnp”の26編(1907)、“The Voice of the City”の23編(1908)、そして“Strictly Business”の23編(1910)中の22編はすべて、ニューヨーク時代の背景をテーマにし、更に、“Sixes and Sevens”(1911)や“Options”(1909)、“Whirligigs”(1910)などの作品の殆んどがニューヨークのものであるという点から考えても、ニューヨークという特殊な都会背景としたO. Henryの文体的パターンが十分うなずけるところである。

しかし反面、ニューヨークでの彼の生活は比較的孤独なもので、人前に出ることを嫌い、交際するといっても、ごく僅かの交友に限られていた。⁽⁵⁾にも拘わらず、Greenwich Villageの家具付の貸間やMadison Squareあたりの安ホテルに宿泊し、公園のベンチの浮浪者と親しく交わったり、そうかと思えば、バーでは多額のチップを支払ったり、乞食に大金を恵むこともあったりした。コーラス・ガールやボードビリヤン、すり、セールスマン、水夫、ギャングなど、ありとあらゆる階層の人達の心をも打つ普遍性や永久性も自からの作品の中に与えている。

そして、O. Henry自身が、決して幸福とは言えない生涯を送ったがゆえに、不幸な人達や努力しても報われない人達に対する強い同情心が、彼の全作品の隅々まで浸透しているように感じられるのである。しかも、彼の人生に対する態度は、あくまでもロマン的であり、いささかもニヒリスト的なところがない。宿命を宿命として、素直に微笑をもって受け入れ、その中にも人生への光明、人生への希望を求めて止まない姿勢が感じとれるのである。

自然主義作家のように、科学的な、きめの細かい眼をもって人生を分析する冷厳な態度は欠けていたかも知れない。確かに、彼の一字一句に細かく神経を働かせた筋の運びを見てもジャーナリスティックな難を免れない部分もある。しかしながら、底抜けに明るく軽快な態度こそは、O. Henryを永遠に愛すべき

作家たらしめる所以であり、William Dean Howells (1837~1920) が信じていたように、“The more smiling aspects of life”がアメリカの最も著しい特徴であるという意味では、O. Henry は確かにアメリカ的な代表的短編作家とすることができよう。

III O. Henry の文体に見られる特徴と実証

O. Henry の作品には、彼独得の表現や語法、修辞法など他の作家にくらべて、かなり顕著な特徴が見られる。例えば、Euphuism や Slang、あるいは、“The Last Leaf”に出てくるようなニューヨーク南部に定着した移民たちの中で使われる、なまりのある英語、それに、Metaphor, Simile, Personification, Onomatopoeia といった特徴が、O. Henry の文体を構築する大きな要素になっているのは事実である。それらの特徴について、そのうちのいくつかを採り上げて、考えてみたい。

(1) Dramatic Surprise

ストーリーの途中で結末の伏線とも言うべき語句が使われたり、事件が起きたりすることがある。O. Henry の作品には、よく思い掛けない結末で終るものが多い。この unexpectedness がドラマで言うところの Dramatic Surprise に当たるわけである。つまり、どんでん返しの手法であるが、彼の作品、特に“The Four Million”の中に収められている作品の大部分が、この dramatic surprise の手法をとっている。しかも、その作品のどれもが短い物語の筋の中に作意的な発想や不自然さがほとんど感じられないことである。これは単なる言葉の遊びではなく、ストーリーの発展と緊接な関係をもっているためであろう。勿論、O. Henry の短編は話の筋を追う傾向が強いため、人間性の観察や生活の描写にとぼしい、とみる学者もいる。humor 作家として、Mark Twain の再来と謳われた Stephen Leacock 教授もその一人である。彼が“O. Henry wrote only anecdotes, not stories”⁽⁶⁾と述べている所以でもある。

しかし、O. Henry 自身は“New York World”誌の編集長であった William

Johnston とのインタビューで、「自分は物語の結末を考えずに書き出すこともあり、ときには最後まですっかり筋を立てて書き出すこともある。そして、あるときには、あらかじめ考えておいた結末に合わせて物語を作ることもある」と述べている⁽⁷⁾。

O. Henry の作品の中には、こじつけと思われるものもあるが、彼の特徴でもある unexpectedness が、その作品の結末に大きな効果を与えているのは事実であり、人物と状況、物語と人間性の関係についても一貫性をもった表現力を発揮する中で、不自然さが少しも感じられないのも確かである。

読者の意表をつく彼独得の ending には、形式的に分けて二種類が考えられる。その一つは、reverse twist ending とでも言う、今述べてきたような「結末の意外性」を強調するものと、もう一つは、sentimental trail とも言うべき感懐の付随する ending とである。

reverse twist ending は、何よりも unexpectedness が key point であり、O. Henry の作品の文学的技巧の核心となっている。予測もつかぬ筋の運びから、最後の一文で読者をアッと驚かせるという手法は、まさに絶品と言わざるを得ない。

彼の先輩作家達の中で、Edgar Allan Poe (1809~1849) からは印象の単一性と構成について、また Bret Harte (1836~1912) からは方言の駆使と軽妙なスタイルを、そして、フランスの Guy de Maupassant (1850~1893) からは surprise ending を学び取った、⁽⁸⁾とされている。しかしながら、O. Henry は、読者を喜ばせるという短編小説の奥義に関しては、彼ら先輩諸作家に優るとも劣らぬ力量を持っていたと言ってもよいであろう。

Pattee は“The Cambridge History of American Literature”の中で、O. Henry の作品を評して、

“The end is always a sensation. No foresight may predict it, and the sensation⁽⁹⁾ always is genuine.”

と述べている。

例えば、“The Four Million”の短編集の中では、“The Skylight Room”, “The Cop and the Anthem”, “Springtime á la Carte”, “After Twenty Years”, “The

Furnished Room”, “From the Cabby’s Seat”, “The Romance of a Busy Broker”など、また、“The Trimmed Lamp”の短編集の中では、“The Last Leaf”, “The Pendulum”, “A Harlem Tragedy”, “The Count and the Wedding Guest”など、そして、“Roads of Destiny”の短編集からは、“Roads of Destiny”, “A Retrieved Reformation”, そしてその他、“White the Auto Waits” (The Voice of the City 集) や“At Arms with Morpheus” (Sixes and Sevens 集), “One Dollar’s Worth” (Whirligigs 集), “A Madison Square Arabian Night” (The Trimmed Lamp) などの作品が、いずれも reverse twist ending が遺憾なく発揮されている代表的なものと言えるであろう。

次に, sentimental tail ending の場合であるが、これは、あたかも霊峰にかかる白雲のように朦朧としたボカン模様の中に、読者の気持を引き込むような余韻が残る結末を、その特徴としている。これに該当する彼の作品を挙げれば、次のようなものがある。

彼の処女作である“Whistling Dick’s Christmas Stocking” (Roads of Destiny 集) は sentimental trail ending の最も典型的なものである。その他、“The Gift of the Magi” (The Four Million 集), “The Green Door” (Ibid), “A Municipal Report” (Strictly Business 集), “The Marionettes” (Rolling Stones 集), “The Passing of Black Eagle”(Roads of Destiny), “Witches’ Loaves”(Sixes and Sevens 集), そして、“The Ransom of Red Chief” (Whirligigs 集) などの名作品の結末も、語数の多少こそあれ、いずれも O. Henry 独得の情趣を醸し出している。

更に、彼の最初の短編集“Caffages and Kings”19 編は、カリブ海に臨む The Spanish Main(南米北岸地方、特にパナマ地峡から Orinoco 川河口までのカリブ海沿岸で旧スペイン領)の Corallo 地方を舞台とした作品で、全体が一つにまとまった長編形式をとっているが、その各短編ごとに切り離しても、それぞれ十分評価に値する短編の総合体を見ることができる。そして、これらの短編のいずれの結末も、この sentimental tail ending の形式を整然と備えているのである。

(2) Humor と Pathos

O. Henry の作品の内容面からの特徴として挙げられるものは、各短編に滲み出る humor や pathos, それに wits の持ち味である。これは彼の trademark とも言うべきもので、彼自身の体験から生れた弱き者への深い同情の涙と、もって生れた楽天的な性格と天賦の才能で全作品に例外なく描き出されている。

O. Henry はよく Maupassant と比較されるが、Maupassant のリアリズムや自然主義に対して、O. Henry はあくまでもロマンチズムの上に立っている。強いて言えば romantic-realism の作風と言えよう。彼が半生の長い苦難と放浪と牢獄の生活にもめげず、心からロマンチストであったことが即ち、読者の心を温め、うるおし、微笑ませ、しんみりさせる美しい humor と pathos を作品に素直に滲み出させた所以でもあろう。一見暗く感じられる彼の作品の中にも、独自の humor がうかがえるのは、そのせいかも知れない。

O. Henry は、「アメリカの Maupassant」と評せられたことがある。勿論これは讃辞であったのであろうが、C. A. Smith によれば、

“I have been called the American De Maupassant. Well, I never wrote a filthy word in my life, and I don't like to be campared to a filthy writer.”⁽¹⁰⁾

と述べており、O. Henry がこの比喩に憤慨している。ここにも彼の長所と短所を垣間見るような気がする。

長所は何かというと、19世紀以後の常識的な orthodox なイギリス文学の系統を引いた O. Henry がこの言葉の中に発見されるからである。また、短所とは言えば、人生の真理に対する態度に飽き足らぬ点のあることを、この一言が暗示しているからである。更に、佐久間原氏は「オー・ヘンリー短編集」の序文で、「Maupassant にとって最も尊いものは人生の真実であった。科学者の態度で人生を解剖し、批判するということがあった。真理の前に、彼は伝統を無視し、古き神をも冒瀆して悔ゆるところがなかった。彼の有する冷酷さは、そこから発するのである。しかるに、O. Henry は一種のロマンチストである。彼は街角に冒険を求め、公園のベンチの上にロマンを求める作家である」と述べている⁽¹¹⁾ように、O. Henry には、Maupassant の夢想だにしなかった humor が全作品の底

に流れているのは事実である。

前にも、O. Henry の作品は、小市民、黒人など殆んどすべて中流階級以下の、しかも、それほど教育のない人々を扱いながら、善良で明るい親しみをもって描かれているのが基本的な特徴であるということを書いたが、果して、彼がそれらの人々とユーモアをどのように結びつけて描いたか、ということである。例えば、その対象とする人間に愛情を持たば、明るく柔らかな笑いとなり、軽蔑的に見れば皮肉になるか、あるいは風刺的になり、しかもその場合、描いた人間そのものでなく、その人間を通じて社会への抗議、反感ということにもなれば、その風刺性は違った性格のものになるのである。従って、O. Henry の笑いは、必然的に彼自身の人間観と深い関わりをもっているものと考えられるのである。

では、O. Henry は小市民をどのように見ていたのだろうか、そのいくつかの例を作品の中から選び、考えてみよう。

短編“The Clarion Call”の中では、O. Henry は都会の朝を迎えた人々の気持を描いているが、小さくかがみ込んで、よく眠れなかった人々には、その朝は“The hideous, bright day”であり、幸い安らかに眠ることのできた人々にとっても、目覚めれば更に心の重くなるような苦勞の一日となるのであった。そして、その夜明けは“blackier than sable night”であった。

“Shrill cries they were near . . . well-known cries that conveyed many meanings to the ears of the slumbering millions of the great city who waked to hear them . . . To some, cowering beneath the protection of a night’s ephemeral cover, they brought news of the hideous, bright day ; to others, wrapped in happy sleep, they announced a morning that would dawn blackier than sable night . . . All over the city the cries were starting up, . . . apportioning to the sleepers while they lay at the mercy of fate, the vengeance, profit, grief, reward and doom that the new figure in the calendar had brought them. Shrill and yet plaintive were the cries, as if the young voices grieved that so much evil and so little good was in their irresponsible hands.”

O. Henry が結論として考えていたのは、「救いのない都会」であり、そこに住

む群集は「運命の手にゆだねられて」流転してゆく人々にすぎなかった。しかし、彼がむしろ運命的であり、「あわれを誘う」と見た庶民は虚無や悲哀の対象ではなく、彼にとって柔かい笑いと愛情の対象であったのである。言いかえれば、明るい笑いを漂わす庶民的 humor の中で表現したのである。

また、“The Gift of the Magi”の中で、“Life is made up of sobs, sniffles, and smiles, with sniffles predominating.”と三つのSの形で単語を並べ、snifflesをもユーモラスに転化しようとするような表現を忘れてはいないのである。

更に、“A Service of Love”の中では、安アパートに住む画家の家庭を紹介しながら、

“Flat-dwellers shall indorse my dictum that theirs is the only true happiness. If a home is happy, it cannot fit too close”.

と、家庭の幸せがどんな狭苦しいところでも、心掛け次第で得られるものであることを述べている。

以上のように、部分的に引用した“The Gift of the Magi”と“A Service of Love”は、趣旨として同じ傾向のものであり、このような苦しい生活の中での最大限の思いやりと優しさをお互いに感じるとするという happy ending で、ほほえましい humor として手際よくまとめあげている。

もう一つの例を挙げてみよう。“The Pendulum”という作品がある。このストーリーは、ある安アパートにサラリーマンの家庭があり、主人はいつも夕食後、玉突きにゆく趣味がある。ある日帰宅してみると、妻は不在、「母が急病」という電報を受けて、出て行ったことがわかる。急に淋しくなった夫は、もう二度と玉突きはすまいと後悔するが、その矢先、意外にも妻が帰ってくる。母の病気は案外軽くてすみ、彼女は次の汽車で帰って来た。その姿を見た夫は安心して、途端に帽子を手にとり、又玉突きにと出掛けてゆく。……という筋だが、この作品について Stephen Leacock は、

“The writings of O. Henry again and again exhibit this peculiar quality. Let anyone read the matchless story called ‘The Pendulum’”.

と賞讃⁽¹²⁾している。ここで Leacock が述べている this peculiar quality というのは humor の持つ特徴の一つである Pathos のことを指しているのであるが、広く人

生の pathos が基調となっている“high form of humor”即ち“the incongruous Contrast between the eager fret of our life and its final ⁽¹³⁾nothingness”が描かれていると指摘しているのである。

“The Pendulum”でユーモラスに表わされた主人公の John Perkins と妻の Katy の生活態度のコントラストが humor となるのである。同時に、そこに一種のわびしさ、生きる者の哀れさをムードとして残し、一般には、この Pathos が極めてすぐれた humor の特性である反面、一つの弱さも内包しているのではないかと、私は推察するのである。

いずれにせよ、O. Henry の作品の基礎となる文学思想や humor の表現方法にも一定の限界があるが、常に生活に苦しむ人々の世界に愛情をもちながら、全体としては柔かい humor の光をあてて描いたということは、彼の大きな特徴とすることができるであろう。

Stephen Leacock も次のように述べている。

“Greatest of all of O. Henry’s characteristics is the power of bringing good out of evil, of finding a place for love and laughter, where all around seems misery and ⁽¹⁴⁾sin”.

(3) 倒置法 (Inversion) と分詞構文 (Participial Construction) の多用

表現文法論の立場から、O. Henry の文体的特徴として位置づけられるものに、倒置法と分詞構文の多用性を挙げることができる。

短編小説が世界で華かに開化したのは、19世紀となってからであるが、O. Henry が作家として世に出る前のアメリカの短編小説界の発展に貢献した Washington Irving (1783~1859), Edgar Allan Poe (1809~1849), Nathaniel Hawthorne (1804~1864), Bret Harte (1836~1902), 更に、20世紀前半の「失われた世代」⁽¹⁵⁾の代表的な作家、Ernest Hemingway (1899~1961), William Faulkner (1897~1962) などの作品と比較してみても、O. Henry は倒置法や分詞構文という文法的用法をかなり多く用いているのがうかがわれる。彼の代表的な作品を15編ほど選んで、それらの用法の統計を出してみたところ、倒置法

は67ヵ所、分詞構文は92ヵ所もあり、この数字は前述の作家達の表現の中に見られる数よりも遙かに多い。

因みに Hemingway と Faulkner の短編を、それぞれ数編を選んで調べてみたが、いずれも一編あたり平均3ヵ所か4ヵ所程度であった。それらの作品の中では倒置法は殆んど見られなかったし、使われていても分詞構文が殆んどで、しかも、その分詞構文も文尾に用いる形式のものだけであった。しかし、Hemingway も Faulkner も倒置法が見られないというわけではない。O. Henry との比較において少ないというだけのことである。従って、彼が極めて頻繁に倒置法を用いているということは、彼の短編の文体の一部分にすらなっているということができるであろう。

では、ここで O. Henry の作品の中から倒置法の例を、形態別に列挙しながら考察してみたいと思う。

① Negative の副詞句が先行している例——

- (a) *Never, never begin a story this way when you write one.* (Springtime á la Carte)
- (b) *Never did he call for anything but stale bread.* (Withes' Loaves)
- (c) *Never during their two years of matrimony had he and Katy been separated for a night.* (The Pendulum)
- (d) *Hargrave's success must have kept him up late that night, for neither at the breakfast nor at the dinner table did he appear.* (The Duplicity of Hargraves)
- (e) *Under no circumstances would I accept a loan from a casual acquaintance;* (Ibid)

(a), (b), (c)は否定副詞 never を文頭に出して、否定文意を強めている。(d)は相関語句 neither~nor に導かれたため、倒置法が用いられている。(e)はnoを含む副詞句を文頭に置き、倒置法をおこなっている。

② 副詞句＋形容詞が先行している例——

- (a) *So simple in courtesy and honor was Grandemont and, perhaps, so serenely*

confident in the prestige of his name, that the most likely reasons for his vacant board did not occur to him. (The Renaissance at Charleroi)

(b) *Peculiarly striking* to the optic nerve was *this notorious marauder*. (The Passing of Black-Eagle)

(c) *So quiet* was the village that a score of people heard the roar of the great pistol. (*Ibid*)

(a)は was の補語である simple を副詞の so が修飾する形で倒置法を用いている。O. Henry の文体には、まれに、Strong and simple was Chunk McGowan のように、副詞なしの倒置法の例も見られるが、これは現代口語英語には殆んど用いられない文法的表現である。(b)も副詞 peculiarly が striking を修飾した形になっている。(c)では、so が quiet を修飾し、that と相関語句になっている。

③ 副詞句 + be + 主語の例——

(a) *In the vestibul below* was a letter-box into which no letter would go, and an electric buttom from which no mortal finger could coax a ring. (The Gift of the Magi)

(b) The hibernatorial ambitions of Soapy were not of the highest. *In them were no considerations* of Mediterranean cruises, of soporific Southern skies or drifting in the Vesuvian Bay. (The Cop and the Anthem)

(c) *On the opposite side of the street* was a restaurant of no great pretensions. (*Ibid*)

(d) *There on the floor* was still Ben Price's collar-buttom that had been torn from that eminent detective's shirt-band when they had overpowered Jimmy to arrest him. (A Retrieved Reformation)

(e) *On the bottom shelf behind the counter* was a pound of fresh butter that dairyman had left ten minutes before. (Witchos' Loaves)

(a)は was の前に Preparatory “there”が省略されている一般的な倒置法である。(b)も(a)と同じように、存在を表わす there を省略した形で、文と文を意味的に結びつけて文の流れをうまく作り出している。(c)は先行文の street を基準に

して、restaurant の所在と様子を述べた文で、普通の形式にするよりも先行する文との流れをよくしている。(d)は on the floor という表現だけでなく、there という副詞を用いて floor のある場所を明確にしながら、特定の場所 on the floor を表現している。(e)は(a)と(b)の場合と同様、was の前に Preparatory “there”を置く there 挿入変形の適用である。

④ 副詞句＋自動詞＋主語の例――

- (a) *In hurried Mrs. Widdup, and stood by this chair.* (The Whirligigs of Life)
- (b) *Up the road came a sound of creaking axle, and then a slow cloud of dust, and then a bull-cart bearing Ransie Bilbro and his wife.* (Ibid)
- (c) *On the front seat a gaunt, tall man, dressed in black broadcloth, his rigid hands incarcerated in yellow kid gloves.* (A Blackjack Bargainer)
- (d) *The tree room seemed in portentous disorder. All about lay her things in confusion.* (The Pendulum)
- (e) *Near the right hand of John Perkings stood a chair.* (Ibid)
- (f) *He was passing a red brick mansion near the beginning of Fifth Avenue, in which lived two old ladies of ancient family and a reverence for traditions.* (Ibid)
- (g) *Down the back stairs came Katherine with her smile like sunrise on Gweebarra Bay.* (The Lost-Blend)
- (h) *For there drifted out to Soapy's ears sweet music that caught and held him transfixed against the convolutions of the iron fence.* (The Cop and the Anthem)
- (i) *Before him stood a box car, the door of which, by some means, had been lefted slightly open.* (The Passing of Black-Eagle)

(a)のように、In が文頭に出る倒置法は、現代英語では殆んど見られない。(b)では、the road が意味上先行文と接続し、up は came に密接に結びついている。and then が二度使われているが、そのあとにそれぞれ came を導入して and then came.... とすることが可能である。同一構造の文を一層簡潔にするため、接続

副詞のあとの動詞 *came* を表現していない。(c)の *on the front seat* は場所を示す副詞句として、文頭の位置を占めているが、*his rigid hands incarcerated in yellow kid gloves* という独立分詞構文が副詞句として付加され、文語的特色を強めている。(d)は、*Her things lay all about in confusion.* という語順にすれば、現代英語として自然な形となる。(e)は、*a chair stood* と語順を変えることができる。(f)では、*which* が *the beginning of Fifth Avenue* を受け、*in which* が副詞句として機能しているため、倒置法が可能となるのである。(g)は、*Katherine came down the back stairs with her smile like sunrise on Gweebarra Bay.* とすることができる。(h)も主部に *that-clause* を伴った長い文であるため、このように動詞のあとへまわせば、文が *front-heavy* にならずにバランスのとれた文となってくる。主語に定冠詞がついていないのも、*there-be* 構文の場合に不定詞がつく傾向があるのと同様に考えることができる。(i)は、関係詞節をともなって、文が拡張されている。

⑤ 副詞句 + be + 過去分詞 + 主語の例——

- (a) *Everywhere was carelessly distributed the paraphernalia of the place—ropes, bridles, saddles, sheep pelts, wool sacks, feed troughs, and camp litter.* (The Passing of Black-Eagle)
- (b) *Buckled around him was a belt full of cartridges with a big six-shooter in each of its two holsters.* (*Ibid*)
- (c) *The rich wainscoating reached halfway to the ceiling. Along and above this had been set the relieving lightness of a few water-color sketches of fruit and flower.* (The Renaissance at Charleroi)
- (d) *The daily bout at cards had arranged itself accordingly, and to him was assigned the ignoble part of the onlooker.* (A Blackjack Bargainer)
- (e) *On an extemporized couch of empty boxes and chairs was stretched the mortal corporeality of Major Wentworth Caswel.* (A Municipal Report)

(a)は場所を示す副詞が一語の例。普通の語順にすれば、*Everywhere the paraphernalia of the place—ropes, bridles, saddles, sheep pelts, wool sacks, feed*

troughs, and camp litter—was carelessly distributed.となる。(b)は、過去分詞＋副詞句の形式を文頭にもってきて、倒置法が用いられている。主語の belt には full of...holsters という形容詞句がついている。この場合、around him の him が先行する文中の人物を受けているので、him は文頭に近い場所に置く方が better なのである。(c)は、過去完了形の文が倒置文となっている例である。これも(b)の場合と同様、Along and above this という副詞句の this は、先行文にあるものを受けているので、文頭の近くに置かれている。普通の語順にすれば、...the relieving lightness of a few water-color sketches of fruit and flower had been set.となる。(d)は、the ignoble part of the onlooker was assigned to him.と表現する方が普通である。(e)は、副詞句＋be＋過去分詞＋主語の典型的な例である。普通の語順では、The mortal corporeality of Major Wentworth Caswell was stretched on an extemporized couch of empty boxes.となる。

以上のように、受動文における主語はすべて無生物という特徴をもっている。受動文において倒置法が用いられているのは、現代英語ではかなり formal な文に見られるようである。

では次に、O. Henry の文体に多用される分詞構文 (Participial Construction) の例をとり上げてみよう。

分詞構文に見られる形式には三種類ある。即ち、分詞構文を主文の前に置く文頭型、分詞構文を主文の主語と述語の間に置く文中型、そして、従属節を主文の後方に置く文尾型などである。O. Henry はこれらの三種類の分詞構文をどの作品にも極めて効率的に活用しているのがかなり見られる。彼の文体の特徴の一つとして指摘できるものである。

① 分詞構文が主文の前に置かれる文頭型の例——

- (a) *Beginning artfully to question the boy concerning his choice of sweets, he gradually drew out the information he wanted.* (The Passing of Black-Eagle)
- (b) *Looking out between the slats, he saw it was a bright, moonlit night. Scrambling out, he saw his car with three others abandoned on a little siding*

in a wild and lonesome country. (*Ibid*)

- (c) *Approaching slowly and speaking smoothly*, he followed the animal, which, after its first flight, seemed gentle enough, and secured the end of the twenty-foot lariat that dragged after him in the grass. (*Ibid*)
- (d) *Disregarding the song of the birds, the waving green trees, and the smell of the flowers*, Jimmy headed straight for a restaurant. (A Retrieved Reformation)
- (e) *Going in*, Hargraves would find a little table set with a decanter, sugar bowl, fruit and a big bunch of fresh green mint. (The Duplicity of Hargraves)
- (f) *Not knowing any one there*, Miss Lydia, in a mild flutter of wonder, sat down by her table and opened the letter with her scissors. (*Ibid*)
- (g) *Hardly believing that she heard him aright*, she unpinned the bud from the bosom of her dress, and placed it in his hand. (A Retrieved Reformation)
- (h) *Trying doors as he went, twirling his club with many intricate and artful movements, turning now and then to cast his watchful eye down the pacific thoroughfare*, the officer, with his stalwart form and slight swagger, made a fine picture of the peace. (After Twenty years)
- (i) And then, *all these theories being wrong*, you will please let the story proceed. (Springtime á la Carte)
- (j) *Suddenly inspired*, Miss Martha seized the opportunity. (Witches' Loaves)

② 分詞構文が主文の主語と述語の間に置かれる文中型の例——

- (a) Jimmy, *looking like an athletic young senior just home from college*, went down the board sidewalk toward the hotel. (A Retrieved Reformation)
- (b) And then the successful inventor, *searching his pockets*, found an overcoat button. . . . the extent of his winter trousseau. . . . and, *wrapping it carefully*, placed the ostensible change in the pocket of confiding juvenility. (The Passing of Black-Eagle)

- (c) The young woman faced him and, *stretching out a hand*, caught Soapy's coat sleeve. (The Cop and the Anthem)
- (d) Miss Lyndia, *looking quite grown up and a little worried*, came in from her room. (The Duplicity of Hargraves)
- (e) Agatha, *almost collapsed, but safe*, was gathered into her mother's arms. (A Retrieved Reformation)
- (f) Grandemont, *inspired by the result of Andre's exquisite skill in cookery and his own in the selections of wines*, became the model host, talkative, witty, and genial. (The Renaissance at Charleroi)
- (g) The boy, *having been early taught by his household to regard altruistic advances with extreme suspicion*, received the overtures coldly. (The Passing of Black-Eagle)
- (h) The other, *submerged in his overcoat*, listened with interest. (After Twenty Years)
- (i) An old, old ivy vine, *gnarled and decayed at the roots*, climbed half-way up the brick wall. (The Last Leaf)
- (j) And the wise beast in the shafts, *knowing his ground*, struck into his by-the-hour gait and kept to the right of the road. (From the Cabby's Seat)

以上のように、主語と述語の中間に分詞構文が派生する場合、読者は動詞の部分まで読んで、再び主語を想起し、主語と動詞を脳裏で結びつけて意味を把握することになる。この種に分詞構文は文頭型やこのあとに述べる文尾型よりも技巧が必要である。

③ 分詞構文が文尾に置かれる文尾型の例——

- (a) Mr. Fink sat in his stockinged feet, *reading a newspaper*. (Harlem Tragedy)
- (b) He drew an arm-chair upon the porch, and sat there, *smoking cigarettes and half dreaming*. (The Renaissance at Charleroi)
- (c) Hundreds were the cigarettes be consumed over his claret sitting at the title polished tables in the Royal street cafe's *while thinking over his plan*. (Ibid)

- (d) Miss Lydia sat immovale, *not daring to glance toward her father*. (The Duplicity of Hargraves)
- (e) Johnsy lay, *scarcely making a ripple under the bedclothes*, with her face toward the window. (The Last Leaf)
- (f) In November a cold, unseen stranger, whom the doctors called Pneumonia, *touching one here and there with his icy fingers*. Over on the east side this ravager strode boldly, *smiting his victims by scores*, but his feet trod slowly through the mage of the narrow and moss-grown “places”. (*Ibid*)
- (g) A persistent, cold rain was falling, *mingled with snow*. (*Ibid*)
- (h) And then, suddenly she leaned against his shoulder and began to cry. . . . to cry and shake with sobs, *holdig his arm tightly, and wetting the crêpe de Chine with tears*. (The Count and Wedding Guest)
- (i) Stuffy Pete looked up at him for a half minute, *stewing and helpless in his own self-pity*. (The Pedulum)
- (j) Inside the cab the fare sat up straight on the cushions, *looking to right and left at the lights and houses*. (From the cabby’s Seat)

このように、付帯状況を示す分詞構文は、文尾に置くのが文章構成上一般的である。主文が表現されたあと、分詞構文が長く続いても、文頭に置く場合と違い、不安を感じさせないからである。

O. Henry の文体を綿密に調べてみると、副詞や副詞句による多様な倒置が散見され、分詞構文も文を修飾し拡張する手段として頻繁に利用されている。特に、一般の作家には余り使用されない文中型が目立つのも O. Henry の文体的特徴と指摘することができる。

(4) Euphemism (婉曲語法) と Euphuism (雅文体) について

これまでに O. Henry の作品における文体上の特徴をいくつか取り上げてきたが、それ以外の特徴として是非指摘しておきたいものに、Metaphor, Simile, Onomatopoeia, Euphemism, Euphuism などの修辞法がある。彼の作品の中には、いたるところにこれらの彼独得の修辞法が発見されるが、本稿では、特に

Euphemism と Euphuism について、その実証例を挙げてみたい。O. Henry の婉曲語法や雅文体には、いささかキザらしい面もないわけではないが、その辺が彼の彼らしい苦心の表現方法であろう。

例えば、“From the Cabby’s Seat”の短編の中に、次のような文章がある。

“It was plain that Jerry had usurped the functions of his cab, and was carrying a ‘load’.”

この最後の“load”という言葉の意味は普通「積荷」ということだが、この場合は、「酒樽」という意味で使っている。これなどは、いかにも O. Henry らしい持って回った雅文体の表現である。

また“The Last Leaf”の冒頭に、

“In a little district west of Washington Square *the streets have run crazy and broken themselves into small strips called ‘places’*”.

という文章がある。直訳すれば、「ワシントン・スクエアの西の小さな地域には、通りがごとく気が狂ってしまい、『ブレース』と呼ばれる小路にわが身をこまぎれにしてしまっている」実は、その平凡な意味は「道がひどく乱れていて……小路に分れている」ということである。これは Euphemism の一例である。こうした修辞法の技巧は、まさに O. Henry の語法や表現の独壇場と言えよう。

では、Euphemism と Euphuism の実例を、彼の作品の中からいくつか列挙してみよう。なお、訳文は大久保康雄訳「O. ヘンリ短編集」からの引用による。

- (a) *Had the Queen of Sheba lived in the flat across the airshaft, Della would have let her hair hang out the window some day to dry just to depreciate Her Majesty’s jewels and gifts. Had King Solomon been the janitor, with all his treasures piled up in the basement, Jim would have pulled out his watch every time he passed, just to see him pluck at his beard from envy.* (The Gift of the Magi)

(もしもシバの女王が路地の向こうのアパートに住んでいたら、ある日デラは髪の毛を乾かすために窓へたらしめて、いっぺんに女王の宝石や宝物の価値を下落させたことだろう。もしもソロモン王が、その財宝をこのアパートの地下室に積みあげて、ここの管理人をしているとしたら、ジムは、そ

のそばを通るたびに金時計をとり出して、王がうらやましがって顎鬚を掻きむしるのを見たことだろう)

- (b) That's Dandy Jim Valentine's *autograph*. (A Retrieved Reformation)

(あれはおしゃれなジム・ヴァレンタインの手口だ)

- (c) "Eighty-first street-let'em out, please," yelled *the shepherd in blue*. (The Pendulum)

(「81番街でございませうーお降りの方はございませんか」と電車の車掌が喚くように言った)

- (d) *The cattle cars of the Manhattan Elevated* rattled away,……… (*Ibid*)

(マンハッタン高架鉄道の電車がガラガラと走り去り………)

- (e) *A flock of citizen sheep* scrambled out and another flock scrambled abroad. (*Ibid*)

(乗客の群がぞろぞろ降りて、別の群がぞろぞろ乗りこんだ)

- (f) *Cats on the back fences* slowly retreated toward Mukden.

(Springtime á la Carte)

(裏の塀の上の猫どもが、奉天に退却するロシア兵のように、そろそろ退却して行った)

- (g) She reached the top of the stairs just as *her farmer came up three at a jump, and reaped and garnered her, with nothing left for the gleaners*. (*Ibid*)

(彼女が階段のてっぺんまで出たとき、彼女の農夫は三段を一飛びで駆けあがってくると、一かけらの落穂も残すことなく完全に彼女を刈りとって、穀倉へ入れてしまった)

reaped and garnered her という表現は、farmer から思いついた農業の縁語を使って、彼女を抱いたさまを巧みに述べたものである。with nothing left for the gleaners というのは、刈り入れ時になると gleaners が reapers のあとについて、落穂を拾う慣わしがある。

- (h) A mite of a little woman *with blood thinned by Californian Zephyrs* was hardly fair game for the red-fisted, short-breathed old duffer. (The Last

Leaf)

(カルホルニアの軟風で血の気の薄くなった、ちっぽけな小娘は、血まみれの拳を握りしめ、息づかいも荒々しいこの老いかさま師にとっては、正面から堂々と攻撃するに価する獲物ではなかった)

- (i) A dead leaf fell in Soapy's lap. *That was Jack Frost's card.* (The Cop and the Anthem)

(一枚の枯葉がソーピーの膝に落ちてきた。それはジャック・フロスト氏の名刺である)

Jack Frost は「霜」の擬人化用法である。

- (j) At the corners of four streets he hands his pasteboard to *the North Wind, footman of the mansion of All Outdoors*, so that the inhabitants there of may make ready. (*Ibid*)

(四つ辻の角のところ、彼は「青空荘」の玄関番である北風氏に名刺をわたす。おかげで屋敷の住民たちも冬支度ができるのである)

the North Wind もその同格である *footman of the mansion of All Outdoors* も前例と同様に擬人化されている。

- (k) Three months of assured board and bed and congenial company, *safe from Boreas and bluecoats*, seemed to Soapy the essence of things desirable. (*Ibid*)

(風の神や警官を心配せずに、食事とベットと気の合った仲間が保証されている三ヵ月が、ソーピーにとっては、望ましい最高のものなのだ)

- (l) Lawyer Oldport had once taken Alexander *in his little pulmonary gasoline runabout* to see the many buildings and rows of buildings that he owned in the city. (Brickdust Row)

(前に一度弁護士のオールドポートは自分の小型自動車にアレキサンダーをのせて、彼がその町に持っている沢山な建物や長屋を見せてやったことがあった)

- (m) The joke pleased Symons. He laughed *within a sixteenth of a note of the audibility permitted by the laws governing employees.* (*Ibid*)

(この冗談を聞くとサイモンズは喜んだ。彼は失礼にならぬ程度にくすりと笑った)

(n) If you find that you have left your pocket-book behind you, *you are made to realize the mildness of Dante's imagination.* (From the Cabby's Seat)

(財布を忘れて乗ったりしようものなら、ダンテの想像力もまだ甘いものだと思いき知らされるに違いない)

(o) *The cock-of-the roost sits aloft like Jupiter on an unsharable seat, holding your fate between two thongs of inconstant leather.* (Ibid)

(この棲木の上の雄鶏氏は、ひとり占めの座席にジュピターのごとく空高くすわり、二本の気まぐれな革紐のあいだに乗客の運命を握っているのだ)

以上のほか、O. Henry 独得の修辞を二、三挙げてみると、

a mountain of blue and brass

(Whistling Dick's Christmas Stocking) という句を「大型の警官」の意味に使ったり、

peripatetic sarcophagus (From the Cabby's Seat) は「動き廻る石棺」という意味だが、これを「馬車」という意味に使っている。

the champion of the root of evil

(Mammon and the Archer) という表現を、O. Henry は「金」という意味で使っている。

また、*for one passage of the sun*

(A Harlem Tragedy) は、「一日だけ」という意味で、

New Bagdad (The Enchanted Profile) を「ニューヨーク」、

the smiling city (Roads of Destiny) を「パリー」という意味に、それぞれ婉曲法や雅文体の形式で表現している。

IV むすび

本稿では、O. Henry の作品や彼の作品に見られる文体の特徴や影響などについて、経歴面と語法の両面から考察してきたが、勿論これだけで O. Henry の文

体的特徴のすべてを言い尽したというわけではない。その一部に過ぎないが、しかし少なくとも、O. Henry の最も独得で、特徴的な側面だけは指摘できたのではないかと思考している。

O. Henry の作品には、以上述べてきたほかに、隠喩、直喩、擬人法、修辞疑問、擬声音といった、あらゆる修辞法が極めて効果的に適用されているのが目立つ。このような表現方法も、彼の特徴的な文体として研究に価する重要なテーマであり、彼の文学的思想やストーリーの意外性、humor や pathos などの基盤となっていることは明白である。これらの実証例については、更に綿密な research が必要であり、今後の研究課題としたい。

〔注〕

- (1) Encyclopedia "JAPONICA" vol. 3 ed. by Shogakukan, 1968, p. 633
- (2) 大久保康雄訳「O. ヘンリ短編集」(1), 新潮社版, p. 205
- (3) Van Wyck Brooks, "The Confident Years", E. P. Dutton, New York, 1952, p. 278
- (4) *Op. cit.* 「O. ヘンリ短編集」, p. 217
- (5) *Ibid.*, p. 221
- (6) Stephen Leacock, "The Greatest Pages of American Humor", Doubleday, Doran & Co., New York, p. 199
- (7) "New York Sunday Times" published April 4th, 1904.
(O. Henry のインタビューは、これが生涯唯一のものと言われる)
- (8) 清水 裕「O. Henry の発想と表現——ユーモアを中心に——」人文学 Vol. 85, 1966, p. 49
- (9) William Peterfield Trent, "The Cambridge History of American Literature", Macmillan, New York, 1947, p. 394
- (10) Charles Alphonso Smith, "O. Henry Biography", Doubleday, Garden City, New York, 1918, p. 83
- (11) 佐久間 原「O. Henry's Short Stories」(英文名著全集 第一輯 第9巻) 英文学社, 1929, p. 1
- (12) Stephen Leacock, "Humour and Humanity", Thornton Butterworth Ltd., New York, p. 242
- (13) *Ibid.*, p. 241

- (14) *Op. cit.* “The Greatest Pages of American Humor”, p. 199
- (15) 第一次世界大戦中に精神形成期を過ごし、戦後の文化に幻滅を感じた世代を言うが、この時代には William Faulkner や Ernest Hemingway のほか、Francis Scott Fitzgerald (1896~1940)、John Rederigo Dos Passos (1896~1970) など、この世代の特徴をテーマにした作家が多く輩出している。

〔参考文献〕

- (1) Krishna Menon, “A Theory of Laughter”, George Allen & Unwin Ltd.,
- (2) J. B. Hubbell, “The South in American Literature”, Duke University Press, 1954.
- (3) Danforth Ross, “The American Short Story”, The University of Minnesota Press, 1961.
- (4) R. B. West, Jr., “The Short Story in America” (評論社「アメリカの短編小説」竜口・大橋共訳, 1955)
- (5) 成田成寿「アメリカ文学思想」, 研究社, 1960.
- (6) Dale Kramer, “The Heart of O. Henry”, Rinehart & Co., 1954.
- (7) Hyder E. Rollins, “O. Henry’s Texas Day” Bookman, New York, 1914.